

日本記者クラブ会報

第 437 号
2006 年
(平成 18 年)
7 月 10 日 発行

〒一〇〇〇〇〇一
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル
© 社団法人 日本記者クラブ
http://www.jnpc.or.jp

緊迫した福井日銀総裁 昼食会

6月13日の国会で、福井俊彦総裁が村上ファンドへの拠出を明らかにしたため、一週間後の昼食会(20日)は大変なことになった。

この日取りは、3月20日に決めていた。そのときはゼロ金利政策変更へのタイミングなどを考えると絶好かなあと漠然と思っていた。ところが、昼食会当日の午後に、富士通総研理事長時代(1999・10)に投資した1000万の運用益の詳細を衆院財務金融委員会へ提出することになったため、大騒動に。世の中な



硬い表情で入場する総裁
左は司会の宇治企画委員長

に飛び出すか分からない。

結果的には、運用益の詳細説明のため、日銀がこの日の夕刻に総裁会見を別にセットしたので、事務局としては驚きに油揚げをさらわれた感じだった。が、総裁の姿勢と力量と覚悟を吟味するためには貴重だった。総裁はナショナル・プレスクラブでの会見を、主に二つの目的に使ったといえる。一つは国民へのお詫びのためで、もう一つは市場とコミュニケーションしながら、フォワード・ルッキングに対応していく金融政策の舵取りとしての自信の表明である。

「最近の金融経済情勢と金融政策運営」についての説明の中で、今後は景気の波をできるだけ小さくし、安定的な経済環境を長く維持することが一番大事だと強調した。そのた

め内外のリスク要因を総合的に判断し、金融政策を展開しなければならぬ重要な局面だ、と。また設備投資の上振れにも警戒を示し、質問に答える形で「早めに、小刻みに、そしてゆっくり政策対応する」と発言した。これで、市場はゼロ金利解除をかなり織り込んだという見方がされているようだ。

あまりに率直で驚いた言葉もあった。「立場に固執しているというこ

念願だった最高裁長官が初登場

クラブ創立から37年、滝鼻理事長の骨折りで、初めて最高裁長官をゲストに迎えた(6・23)。町田顕長官は温厚で極めてゆっくりと話す方だった。最高裁長官の顔が見えないといわれますから、立ってやりましようか、と冒頭から笑わした。

裁判員制度の意義などの説明は、正直いって学者、日弁連、検察などより説得力があった。現在の刑事裁判が法曹の専門家だけで緻密にやる

は死の淵に面していたと、この前に発言)私に与えられた使命をぜひ全うさせていたきたい。それをやり遂げるため、自信をもって努力したい。そこをぜひ買っていただけなら買っていたら良かった。それ以上は説明できることはございません。

まさしくこの会見は後手をふんだ福井総裁にとって真剣勝負だった。これほどの緊迫感の中で、報道のあり方も含めいろいろ考えさせられた会見は初めて。この原稿のためテープを聞き直し、ますますその感が強い。が、いずれにしても総裁だけでなく日銀自体が、市場との対話に比べ世論との対話がへただったことは確かだ。

ため、争点ばかりが多くなり時間がかりすぎていますし、裁判に国民の多様な声を反映させることに大きな意味がある、と。

エリート専門家集団・組織はどこも、ともすれば世間音痴になりやすい。その予防のためにも当クラブを利用してほしい。こちらも「ゲンブツ」に当たらず尻馬にのる論評だけは自戒したい。

(専務理事 岩崎玄道)

麻生 太郎 外相



▼日本の中央アジア外交

国会が長引き、予定時間を30分近く過ぎていたが、さわやかなクルールビズ姿で会場に現れた。総裁選前哨戦の最中だったものの、麻生外相は6月5日に東京で開く「中央アジア+日本」と銘打った会合に向け約30分スピーチした。

97年に初めて中央アジアを訪問してから関心を持っていったというだけに、19世紀の帝政ロシアと大英帝国の「グレートゲーム」から話を始めた。日本人になじみが薄い地域との前提で「中央アジア5カ国のGDP合計は約630億ドルで三重県一県規模とほぼ同じ」など、日本にひきつける工夫が目についた。

聴衆の耳目を集めたのは、ウズベキスタンのカリモフ大統領と会談し

6・1(木) 記者会見 司会 宮田謙一委員
出席 162人

た際、大統領から聞いた話だ。小さいころ、母親に毎日のように日本人捕虜の工事現場へ連れて行かれ、日本人が働く様子を見せられた。そして「日本人は誰も見ていなくてもよく働く。これを見習いなさい」といわれた。それ以来、日本がモデルだった、と語ったという。日本人の琴線に触れる話であり、ソ連時代から強権政治を維持する大統領のしたたかさを示すエピソードでもある。

外相は外交の指針として(1)アフガンなどを含めた広域からみる(2)開かれた地域協力を後押し(3)普遍的価値を共有したパートナーシップの三つを示した。最終的には、環状道路の復興と天然ガス・パイプラインの整備で「平和と安定の回廊」にしようという戦略だ。

しかし、エネルギー資源をめぐり、すでに「新グレートゲーム」が始まっている。とくに中露を軸にした「上海協力機構」が地域ブロック化しつつあり、それとのあつれきを心配する質問も出た。外相は「もめる理由はない」と答えたが、米国と中露のはざまでかじ取りが難しそうだ。

毎日新聞編集委員 飯島 一孝

大関 白鵬

▼草原のホスピタリティー

ひな壇の両肘のついた椅子に192センチ、153キロの巨体は収まらなかった。途端に空気がなごんだ。すべてにゆったりとして鼻から全体に丸みのある童顔には、人を温かく包み込む草原のホスピタリティーがある。

父はモンゴル相撲では五連覇を含む六度の優勝を果たした大横綱。

大柄で包容力ある母は外科医。白鵬は両親の最高の遺伝子を継承した。

新大関で優勝したそのスケールを見れば次の名古屋場所での横綱昇進を今やだれも疑わない。ものを考えるときは、すでに翻訳ではなくダイレクトに「日本語で考える」という。

ライバルを聞かれて「把瑠都(エストニア)」と答えた。「年も同じということ」とほかの力士に気遣いを見せるが、角界はまさにそういうことになっていくのだろう。

建国800年に燃えるモンゴルだ

6・12(月) 記者会見 司会 矢島誠司委員
出席 95人

が、日本の大相撲への関心は尋常ではないようだ。春場所、朝青龍との決定戦は、テレビの視聴率がなんと93%。「相撲が始まるとモンゴル中仕事はしない。車もあまり走らない」。チャンネルは5つあり、それぞれに解説者がいて相撲を放映しているそうだ。

子どものころから草原で自然と親しみパワーをもらってきた。ところが「今のモンゴルの子どもたちは一段と弱くなった」と思います。日本人と変わらなくなりました。テレビを見て運動神経が落ちてます。草原の自然力が落ちて、日本に来て(これからは)そうはいかない。僕あたりが最後(の世代)かな。これもモンゴル来襲を危惧する会員の質問への配慮かもしれないが、歴史ものを読むのが大好きだそうで、時代を見る目は確かだ。よどみない日本語で語る21歳の白鵬は、やさしそうでも末恐ろしい人物に違いない。

日本経済新聞編集委員兼論説委員 工藤 憲雄



「白鵬」と毛筆で揮毫(9P.別掲) 左=ジグジッド代理大使

デイビッド・ピリング フィナンシャルタイムズ東京支局長

6・14(水) シリーズ「在日外国人のみた小泉政権5年」② 司会 広瀬和彦委員 通訳 池田薫 出席 77人

▼英国流ウイットで辛辣な小泉評



女王陛下
下や王室
を笑いも
のにし、
政治家を
痛烈にか
らかうこ

とにかけては年季の入った国からやってきた新聞記者である。その小泉評はウイットに富んでいて小気味いい。いわく、その風貌もしゃべり方も変わっている。話はわかりやすい。女性の人気も高い。いわばポップスター政治家だ。(6月末訪米の小泉首相が、ブッシュ大統領とそろってテネシー州メンフィスのエルビス・プレスリーの邸宅を見学する話に)エルビスの歌をブッシュとデュエットするところをぜひ取材したいと思つて耳栓を買つた——といった調子。そして本題の小泉改革。「改革なくして成長なし」という言葉にはワクワクしたが、経済改革ではめぼしいものはなかった」。

ピリング氏の分析は、日本の景気回復は97年をリストラ元年と見立

て、そこから爾々と進んだ企業の減量、合併などが、企業経営の好転につながり、それが雇用増と賃金の上昇、消費拡大という好循環を招いた。つまり「時間」が日本の回復をもたらしたのであり、「時間は小泉の功績とは言えない」。

グローバルな環境変化もあった。90年代にもう終わりといわれた日本の鉄鋼業がカムバックしたのは、中国特需あつたこと。「中国なくして成長なし」だ。あるいは「不人気な学者竹中氏」の起用による、不良債権処理と銀行の破綻回避は「日本経済の転換点にはなつたが、改革ではなかった」。むしろ経済改革の旗手は、時価評価経営などを導入した橋本政権だった。そして、自民党をぶつつぶす、といつて自民党を救つた政治改革にこそ小泉改革の功績があつた、というのがピリング氏の小泉評価だった。

ただし「改革のために自民党支持を」という小泉メッセージは「タバコをすえば健康にいい、というようなものだ」。常識的でいて辛辣。滞日4年にして、よくみている。

朝日新聞出身

見市 元

カマル・ナート インド商工相

6・16(金) 記者会見 司会 稲田好美委員 通訳 澄田美都子 大野理恵 出席 41人

▼「日本街」誘致の次は?

「重要なのはインドの労働力と日本の技術革新の連携。これにより大きなシナジー(相乗効果)を発揮できる」。日本とインドの力を合わせ、ともに発展を目指す今後15年間の協力シナリオをこう描いてみせた。

核問題で国際社会と対立するイランや北朝鮮をしり目に、核拡散防止条約(NPT)加盟を拒みつつブッシュ米大統領からことし3月、核技術協力を引き出した不思議な国。

そういえば1998年に強行した核実験に、唯一の被爆国として強く反発した日本も首脳外交などを経て、今や「インドにとって最大の政府開発援助(ODA)供給国であり、機関投資家のインド向け投資は米国や欧州を上回つてナンバードワン」と、



持ち上げられるほどに変化した。

情報技術(IT)を軸とする高度成長の立役者が次に狙うのは、日本の大企業だけでなく中小企業も容易に進出できる工業団地の誘致。「年9%の経済成長を達成しつつ、熟練労働力は枯渇しない。既に2億5000万人いる中産階級は、毎年2500万人ずつ増えている」と売り込む。

インド進出企業の日本人駐在員にとって、悩みの種は暑さに加え、食事、教育、医療、娯楽など。こうした機能を併せ持つ「日本街」を日本の開発業者に建設してもらい、中小企業を「磁石のように」引きつける。日本の中小企業から「2年間で5億ドルの投資を期待したい」と皮算用も。

課題はインフラの整備と、需要が膨らむ一方の電力などエネルギーの確保。日本との原発開発協力について「時期尚早」としつつ「日本が参加していけない理由はない」と示唆するなど、地球温暖化を招かないエネルギーの開発に向け、原子力では日本とインドが協力する日も近いのでは、と感じさせられた会見だった。

共同通信経済部

細田 昌夫

大鹿 靖明 朝日新聞・アエラ編集部記者

6・19(月) 著者と語る⑥「ヒルズ黙示録」
司会 川戸恵子委員 出席 118人

▼金融暴走族と村上の指南



ライブ
ドアとニ
ッポン放
送、楽天
とT B
S。昨年
相次いだ
新旧メデ

イア対決劇の裏には、仕掛け人として村上ファンドの村上世彰前代表がいた。大鹿氏の著書「ヒルズ黙示録」は丹念な取材の積み重ねで、そんな構図を描き出している。今年に入ってライブドアの堀江貴文前社長と村上前代表が逮捕され、村上ファンドに出資していた福井俊彦日銀総裁にまで問題が飛び火した。それだけに、震源地を観察し続けてきた大鹿氏の発言に注目が集まった。

講演はマスコミ批判で始まった。新聞社や民放の長期政権化といった経営問題に加え、検察の情報に依存しがちな取材現場のあり方にも疑問を呈した。

たストーリーを認めないと事情聴取から解放してもらえない」と嘆いて

いたことを紹介。「検察には政治家、経済人、ジャーナリズムもモノを言えない。戦前の陸軍に似てきた」と語った。

ヒルズ族については、ライブドアの旧経営陣を「金融暴走族」と表現してみせた。制限速度を超えて疾走するが、スピード違反が見つかりそうになると速度を落とすテクニクを持っていったという。彼らに「こちらの道路ならもつとスピードを出せる」と指南したのが村上前代表だったというわけだ。

ただ村上前代表の逮捕に関しては検察批判と絡めて「調べれば調べるほど、インサイダー疑惑が蜚気楼のように消えていく」と語った。しかし、ライブドアをけしかけてニッポン放送の株価を高騰させ、売り抜けた問題は残るのではないかと。ニッポン放送と経営陣の関係に加え、大株主と一般株主の関係にも目を向けて考えるべきだろう。

日本経済新聞編集委員兼論説委員

塩田 宏之

福井 俊彦 日本銀行総裁

6・20(火) 昼食会 司会 宇治敏彦企画委員長
小孫茂委員 出席 258人 写真 栗田格会長

▼信頼回復への謝罪と決意

福井総裁にとって、日本記者クラブでの初めての会見は、かつてない逆境のなかで行われた。総裁自身も、こんな形の登壇になろうとは思って

もみなかっただろう。総裁が村上ファンドに一千万円出資していたことが問題になり、この日は収益の詳細

を国会に報告することになって

いた。会見場は、総裁の発言を聞きもらすまい

と、250人以上の記者であふれかえった。

ふだんは柔和な笑みを絶やさない総裁が、この日の表情は硬く、笑顔も一切みられない。

村上ファンドからの利益はいくらにのぼるか、日銀への信頼が揺らぐ中できちんとした金融政策ができるのか。聴衆の関心は、その二点に絞られていたといえる。

ファンドへの投資を続けたことについて初めて「不徳の致すところ」



と謝罪し、総裁就任時にファンドを解約すべきだったとの考えを示唆した。利益は夕方の臨時記者会見で公表することを明らかにした。

金融政策の運営について「早めに、小刻みに」と表現したため、日銀がゼロ金利政策を7月にやめて利上げに踏み切るといふ観測が強まり、株価が大幅に下がった。総裁は夕方の会見で火消しに努めた

が、早期利上げ説は消えていない。

利上げ説には、総裁の「名誉回復」がからむ。今回かばってもらった政府に「借り」ができ、日銀は当分ゼロ金利を続けざるをえない

いという見方がある。総裁はそんな疑念を払拭したいはず、というのだ。

福井総裁は、村上問題と金融政策は全く関係ないと強調する。だが、総裁が陳謝するたびに日銀の弱みが露呈し、市場が過剰に反応する。日本経済のかじ取り役の信用失墜は深刻な事態である。

朝日新聞論説委員

山脇 岳志



サム・ジエームソン ジャーナリスト

6・22(木)シリーズ「在日外国人のみた
小泉政権5年」③ 司会 橋本五郎委員
出席 76人

▼在日40年記者の「変人」評

「やはり変人でした」

冒頭、田中真紀子さんの98年の自
民党総裁選での小泉評は正しかった
と切り出した。在日40年を越す日本
政治の外国人ウォッチャーがたどり
ついた小泉首相への総括だけに、聞
き捨てるにはできない。

以後1時間半、ジャーナリストら
しく具体例をあげ、全国戦没者追悼
式での発言を紹介したりしながら、
流暢な日本語で検証がつづいた。

首相として変わっている点は、変
人の母、田中真紀子独りの人気によ
って就任できたことと、米大統領領
と現職同士でこれほど親しい関係を
結び合った前例がない二点だ。

親密さは、9・11、イラク戦争な
どが続いた難しい時代に、日本外交
には大きな
プラスとな
った。一方
で、日米の
同盟関係は
急に深まり
軍事の一体
化など安保

体制の構造は強まったが、周りの状
況が悪化して、あるべき機能をして
いないとみる。

5年続けた靖国参拝は、14人のA
級戦犯の取り扱いが問題なので、そ
もそも政府が神社にその名簿を出し
たこと自体が違憲だ。まして日中が
うまくいくことが米国にも好ましい
ので、米国の利益になっていない。

リーダーシップからみても、簡単
な言葉で説得力を持つ劇場政治のセ
ンスがあるが、興味をひかない問題
では無気力となってしまう。昨秋の
総選挙で与党が圧勝したのに、集団
自衛権、消費税値上げ、憲法改正等、
みな先送りしてしまった。

こだわりと淡泊さと、矛盾する姿
をジエームソンさんは描いた。

明治維新から二世世代60年の192
8年に、田中義一内閣で張作霖爆殺
事件を起こし、日本帝国は米国と敵
対して破滅への道をつつ走る。

その敗戦から昨年は60年。「大統
領型」政権でメディアを巧みに操り
ながら米国追従の道歩んだ小泉さ
んは、後世の日本人からも変人とよ
ばれるのだろうか。

朝日新聞出身

武藤 誠

町田 顕 最高裁長官

6・23(金) 昼食会 司会 滝鼻卓雄理事長
菅沼堅吾委員 出席 95人

▼人柄にじみ出たクラブ初会見

日本記者クラブ設立以来、初めて
という「画期的な会見」が実現した
のも、この人のキャラクターに負う
ところが大きいだろう。

クラブではこれまで、佐藤栄作氏
から小泉純一郎氏に至るまで、12人
の現職総理が会見した。衆参両院議
長の会見も、土

井たか子氏と斉
藤十朗氏るとき
に実現してい
る。三権の長で
登場していない
のは、最高裁長
官だけだった。

クラブ側は何
度も出席を求めてきたが、最高裁長
官には、司法行政のトップのほか、
大法院の裁判長という顔がある。具
体的な裁判の話をするわけにもいか
ないということ、断っていたのだ
ろう。



町田長官は今回、話題を裁判員制
度に限定はしたものの、進んで会見
を買って出たフシがある。前例を意
識しない、ちよっと変わった裁判官

なのである。

東京高裁の部総括判事だった時、
分譲地内で自宅前をゴミ集積所にさ
れた人が、場所の輪番制に反対した
人にはゴミを出させないよう求めた
訴訟を担当した。

1審の横浜地裁は原告の訴えを退
けたが、町田判事はそれを覆す判決
を言い渡した。差し止め請求のハー
ドルは高いため、驚い
た裁判官も多かったよ
うだが、最高裁では、
その高裁判決が維持さ
れた。

町田長官のリベラル
な面は、23日の会見で
も発揮された。

裁判員制度を導入す
るのは、日本の刑事裁判が抱えてい
る問題点を正すため。評議で裁判官
から圧迫を受けたかどうかは、話し
てはいけない秘密に当たらない――
など。

自らは民事が専門だからなのかど
うか。最高裁長官のこだわりのない
語り口は、刑事裁判官の肝をちよっ
と冷やしたかも知れない。

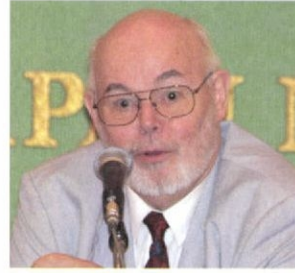
読売新聞論説委員

石井 一夫

ゲプハルト・ヒールシャー
ジャーナリスト

6・26(月)シリーズ「在日外国人のみた小泉政権5年」④ 司会 中井康明委員 出席 61人

▼戦後処理に大胆な行動と譲歩を



ゲプハルト・ヒールシャー氏は、日本を拠点に南ドイツ新聞の極東特派員を30年近く務めた在日外国人ジャーナリスト。かつての知日派。第一次佐藤内閣以降、18人の首相の政治手腕をウオッチし続けてきた。戦後の歴史や政策課題で日本と多くの共通点を持つドイツ出身のベテランジャーナリストの言葉は、鋭角的で説得力を持つ。

小泉首相について、氏は「マスコミを利用しながら自分の信条を直接国民に訴える、日本では珍しい欧米型のリーダー」だとその政治的異才に注目する。ただ小泉首相が「自民党をぶっ壊した」とする見方にはくみしない。「首相主導の人事と政策決定」という二つの武器で「派閥の機能を破壊し」ある程度の体質転換に成功はしたが、自民党の本質には変わりはないという冷静な見方だ。

郵政民営化をはじめ内政には一定の評価をするが、外交には点が辛い。議論百出の小泉首相の靖国神社参拝に関しては、「個人的な思いを実現するために、中国や韓国との関係を悪くするのは国益を損なうものだ」と手厳しい。

氏は中国や韓国との関係がぎくしゃくする要因として「戦後処理」の仕方が関わっていると指摘する。日独を同列に論じる事はできないとしながらも、氏は自分の故郷の東プロイセンが、戦後失われた例を挙げて「ドイツが近隣国に与えた危害を考えると領土割譲もやむを得ない」と言い切る。

その犠牲の上に欧州の今の繁栄と平和が築かれているからだ。氏は日本が、東アジアにもEUのような共同体を作る意志があるなら、未解決の戦後処理問題や領土問題で大胆な行動と譲歩をすべきだと熱意を込めて語った。

氏の主張に異論もあるだろうが、内向気味の日本にとって、外部の視線が依然として貴重であることを痛感した。

NHK解説委員

百瀬 好道

三極委員会「ロシアへの提言」発表

6・27(火) 記者会見 司会 小孫茂委員 出席 60人

▼矛盾にみち適正な評価は困難

チャーチル英首相は、ロシアについて、「謎の、そのまた謎の謎」と言った。これに対し、ロシア国内では「ロシアは頭で理解はできぬ。ただ信じるのみ」という有名な言葉がある。いずれにせよ、ロシアは昔から謎と矛盾に満ちた国であり、その取り扱いには苦労する。

日米欧の「三極委員会」は今年度の共同研究に、このロシアをとりあげ、「ロシアとのかかわり合い…これからの局面」と題する報告書を発表した。日本から研究に加わった渡辺幸治・元ロシア大使によれば、キッシンジャー元米國務長官は「近來にないベストの報告書」と賞賛したという。その報告書の冒頭に現れるのが「現在のロシアは矛盾にみち、適正な評価は著しく困難」という言葉だ。ロシアは過去6年政治安定を享受



左から下斗米 伸夫・法政大教授 渡辺幸治・元ロシア大使 山本正・日本国際交流センター理事長

し、目覚ましい経済発展を遂げたが、将来については不明瞭。ロシアは歴史上かつてない自由を謳歌しているが、その一方で国家による支配が進む。G8の議長国になりながら、西側との関係緊密化は進まない。それでも、報告書は「ロシアの置かれたユニークな状況を理解し、辛抱強く、かかわり合いを維持すべき」と結論付けた。

これに対し、下斗米伸夫教授は7点にわたり、詳細なコメントを行った。全部を紹介できないのが残念だが、「西側から見たロシア観」に対する「ロシア内部から見たロシア観」による対比だったといえる。全体を聞いて思うことは、ロシアも前途多難だが、三極委員会の将来も容易ではないとの感想だった。日米欧に対抗するように中露印という「新三極」が勃興しつつあり、世界は激動期に入りつつあるとの予感なのかもしれない。

毎日新聞出身

石郷岡 建

猪口 邦子 少子化・男女共同参画担当相

6・28(水) 記者会見 司会
飯野奈津子委員 出席 59人



▼新支援策の実効性は？

郵政解散による昨年9月の衆院選で国際政治学者から政治家へ転身した。「小泉スクールの一員であることに誇りを感じる」と常々語り、自他共に認める小泉チルドレン。

今後の少子化対策を打ち出した「新しい少子化対策について」(少子化社会対策会議決定)がまとめられた直後の今回の会見は、「子育て家庭に国が寄り添う姿勢を示せた」(体系的で抜本的な総合対策)と繰り返し猪口氏の達成感だけが印象に残った。

就任から8カ月、全国10ブロックでの首長との会合や、有識者による委員会で議論を深めた。その間に合計特殊出生率(05年)は過去最低の1・25を記録、初の専任担当相である猪口氏が双肩に担うものは重さを

増した。対策の取りまとめ後、時折見せる安堵の表情がそれまでのプレッシャーの大きさを物語った。

新しい少子化対策は子育て家庭への社会全体での支援、親の就労に関係ない全家庭支援、仕事と家庭の両立支援と男性も含めた働き方の見直し、出産前後や乳幼児期の家庭への総合的支援——などを基本的な視点として掲げ、「子育て支援策」「働き方の改革」について具体策を挙げた。

その中でも特に注目を集めるのが、児童手当の乳幼児加算(3歳未満)創設や、妊娠中の健診費用の負担軽減など経済的支援策だ。

しかし現段階では、各対策の詳細は見えてこない。乳幼児加算を例にしても、具体的な加算額や数千億円と見込まれる財源の確保策は示されないままで、国民が支援策を実感できる状況とは言えない。実効性にはまだ疑問符がついた状態だ。

少子化対策は「ポスト小泉」へ引き継がれるが、具体化に向けて動き出した今こそ重要な時期。猪口氏には9月まで最後の奮闘が期待される。
毎日新聞政治部 渡辺 創

大野 元裕 中東調査会上席研究員
宮家 邦彦 元駐イラク公使

6・29(木) 研究会「中東ベシック」
15 司会 脇祐三委員 出席 71人

▼テロが一大産業化したイラク

すでに馴染みとなっている「中東ベシック」の15回目は、中東調査会上席研究員の大野さんと元駐イラク公使の宮家さんの2人を迎えて開かれた。

泥沼化するばかりのイラクの治安情勢について、大野さんは「プロのテロリストのやり方である自爆テロは1年前に比べ3分の1に減っているのに、イラク人の死者は逆に増加している」とし、国際テロリスト、ザルカウイ容疑者の死亡でも、治安の改善は望めないと分析。一方、宮家さんは、「冗談のような話」と前置きしたうえで、「イラクでは今や、テロ産業が一大産業に成長した。偵察を専門にする勢力や、拉致の実行をする勢力、交渉を得意とするグループなど、それぞれが得意分野を持つてしっかりと根を張った産業にな



大野氏



宮家氏

った。また、外国からその産業に投資するファンドみたいなものまでできた」と、治安改善が進まない背景を柔らかく説明した。

また、宮家さんはやや見方を広げ、イラク戦争後の地域情勢についても分析。周辺諸国は、自分たちの政権の生き残りを真剣に考えるようになったとし、「イランは、フセイン政権が核を持っていないため攻撃されたと考えたかもしれない。だから、できるだけ時間稼ぎをして、核開発の既成事実を積み上げようとしているのかもしれない」と語った。

マリキ首相の正式政権が発足したイラク。会場からは、今後の見通しについての質問もあったが、それについては2人とも、「うーん、何とも難しい」。内容は暗くても、ほどよく笑いもこぼれ、時間の経過の速く感じる会だった。

毎日新聞外信部

小倉 孝保

石川 裕己 海上保安庁長官

6・30(金) 記者会見
司会 角南源五委員 出席 92人

▼ 拿捕は考えられない



「冷静かつ的確に粛々と……」。

石川長官は言葉を選びながら慎重に会見に臨んだ。7月3日も韓国側が竹島周辺海域で海流調査を行うと伝えられている最中の会見となっただけに、会見場には、もちろん韓国、台湾、中国など隣接した問題海域を抱える国々、地域の記者が熱心にメモをとっていた。

4月に「明洋」「海洋」2隻の調査船が境港を出航するときのことについて長官は、「日本の測量船、明洋と海洋があの海域で拿捕されることは国際法上ありえないことと考えていた」「われわれは武装もしていないし、巡視船もつけていない」と述べたが、実際、あの時、韓国側は20隻の警備艇を派遣し、拿捕を含むあらゆる手段を講じて阻止すると公言していた。

当然のことながら拿捕されるよう

な事態は想定されたと思うが、この質問に長官は「仮に妨害があった場合は、その事実を把握することが大事で、妨害の程度によっては安全を考慮し、調査をあきらめざるをえないと考えていた」という。国際法上の話は、現実には実効支配している国には通じないとあらためて考えさせられた。

韓国が予定している海流調査に関しては、「連絡がないまま調査が行われても、拿捕することは考えられない。現場で無線や拡声器を使って中止要請をする」とどまるといふことだ。あくまでも冷静な対応をとるとしているが、長官の言葉の端々には、調査をやるべきだという国民の声にこたえられない無念さを感じられた。

30年間この海域の調査をやつてこなかったことについて、「船も要員も限られている、日本海側は後回しになった」ということだ。

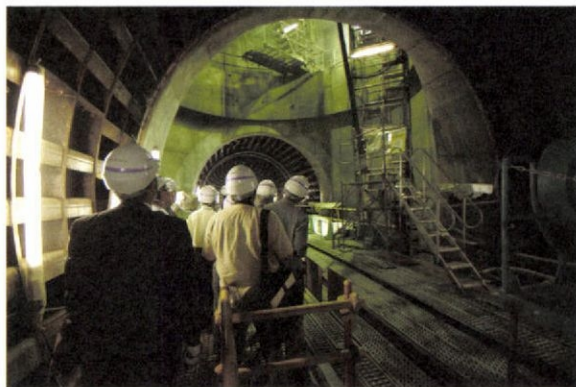
私は常日頃から、海洋国家の日本としては海上の安全、資源確保などのために優先的に費用をかけるべきだと思っている。

テレビ朝日報道局長 角南 源五

日比谷共同溝 見学会

(6.27 参加 55人)

交通渋滞緩和が目的



初夏の日差しを忘れ、ちよつとした。地底探検。

返し工事の回数が減ることによる交通渋滞の緩和だ。入坑口は虎ノ門交差点にある立坑。エレベーターで約40m降り、横に伸びる直径約7mの円筒形の共同溝に入る。上・下水道、電気などの仕切りはまだできておらず、作業通路をほぼ水平方向に日比谷立坑まで30分ほど歩いたが、換気が悪くノドが不快だった。

深い理由があつて参加を申し込んだのではなかった。わが社の東京本社機能が今秋日比谷に移ると、趣味で沖縄旧海軍司令部壕、連合艦隊司令部地下壕(慶応大日吉キャンパス内)など戦争遺跡をみてきた延長線上で、現代の地下構造物ものぞいてみようという程度だ。

共同溝は、上水道や下水道、電気、電話といった生命線を収容するため地下に造られるコンクリートのトンネル状の施設。日比谷共同溝は東京・虎ノ門から日比谷公園までの国道約1500m間で、地下約40m地点を通っている。国土交通省によると建設の主たる目的は、道路の掘り

共同溝は最近、地震からライフレインを守るという意味で注目されているという。阪神淡路大震災の際、共同溝はコンクリートのはく離やひび割れがあつたものの内部の施設に被害はなかつたそうだ。

都内の国道は総延長の約70%で共同溝の整備が完了したが、都道はわずか1%だそう。アジア太平洋戦争で特攻隊の出撃命令を出した連合艦隊司令部地下壕などの戦争遺跡と異なり、共同溝は人々の平穏な暮らしを支える。地方でも国・県道で建設を促進してもらいたい。

中日新聞社東京秘書部長

川口 俊樹



■網取りへ 15歳で来日して6年。ゲストブックへの揮ごうは細い方の毛筆を選び、ご覧のようにのびのびと。モノを考えるのも、日本語。だという。なぜそんなに日本語が上手になったのかと問われると、「相撲が強くなるためには、親方の言うことが分からなければいけないから」と。もちろん24時間日本語どっぷりで過ごす相撲部屋での生活環境もあるだろうが、草原で培ったこの強い気持ちこそが躍進の原動力かも。

■会議報告■
第355回企画委員会

(6・8 宴会場)

司会をした委員からの行事報告の後、今後のゲスト候補や研究会テーマなどを協議した。
出席 宇治委員長、宮田(謙)、山田、中井(良)、橋本、小孫、春名、稲田、菅沼、影山、井田、角南、和田、鳥居、藤村の各委員。

第273回会報委員会(6・9 大会議室)

7月号の編集について協議した。
出席 住田委員長、石田、伊藤、仙石、高橋、西田、松本の各委員。
第346回会員資格委員会
(6・15 小会議室)

7月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。
出席 石井、高畑、伝川、泉、奥野、田中、山本、今田の各委員。

リレーエッセー
五輪④
ミュンヘン(1972. 9)

あのミュンヘン五輪の1カ月前、私は当時、西側記者が自由に入れなかった東ドイツにいた。悪名高い東欧社会主義、ホーネッカー体制を民衆の生活の内側からみてやろうという魂胆だった。

夜がふけても薄明るい白夜の東ベルリンで、労働者が集まる公営の酒場にもぐりこんでは、安物の赤ワインを飲みながら取材する日々を送り、西側に出てきて写真部員とともにむかったのがオリピック会場である。
東側とはなにかもが、ちがっていた。自由である。ビールがうまい。まだ取材班本隊の到着して

いないミュンヘンで、私は水を得た魚のように取材を続け、一面から社会面、連載、別刷り特集といった記事本社に送っていた。
そして、事件の前日、9月4日と「長いあいだご苦労さん」

悪夢は終わっていない

▼八木 荘司

れを喜んだのは、私たちがジープに乗せて走りまわる任務を軍から与えられていた若い西ドイツ軍兵士だった。地方出身の彼は、私たちと一緒に観光地を見てまわることができ、行った先で故郷の母と恋人に絵ががきの一枚も送ることができるのである。

しかし、彼のささやかな楽しみは、翌朝の重大事件発生でふっとんでしまった。
彼は名所めぐりの代

と、取材班キャップは東ドイツ以来の労をねぎらい、「あしたから二日間、軽く旅行してきたらどうだ」といつてくれた。
だれよりもそ



わりに、深夜まで事件現場を走りまわるはめに陥ったのである。
一連の取材で忘れられないのは、アラブ・ゲリラがイスラエル選手団を人質にヘリで選手村を飛び立ったあとを、彼のジープで追っていた夜の光景である。

猛スピードでアウトバーンを突っ走り、ヘリが降りた軍用空港に着いたとき、銃撃戦が行われた直後だった。
手投げ弾を使ったのか、あたりに人肉が焼ける吐き気をもよおすような匂いがただよい、軍用犬が私の下半身にまで鼻をつきつけてくるありさまである。

この夜、人質9人全員と警官1人(ゲリラ側は5人)が犠牲になって、事件は収束に向かった。

しかし、考えてみればテロがテロをよぶ際限のない戦いは、あれから34年経ったいまも続いている。ミュンヘンの悪夢はまだ終わっていないのである。

(産経新聞 当時・社会部記者
現在・編集特別委員)

「日米同盟」うたい込み余話 焼け石に水だった「米側見解」



野村 彰男

小泉首相とブッシュ米大統領との首脳会談は、「新世紀の日米同盟」と題した共同文書で「世界の中の日米同盟」を發展させる考えをうたい合って終わった。これを受けて各紙社説に踊った、「同盟一本やりの危うさ」（朝日）、「盟友」依存超えた関係構築を」（毎日）、「同盟の深化」で広がる外交戦略」（読売）などの見出しを追いながら、私はしきりに25年前に行われた日米首脳会談の思い出と重ね合わせていた。

1981年春。1回目のワシントン勤務も2年近くになって、日々のホワイトハウスや国務省、議会の取材が面白くなっていった。前年11月の大統領選挙で、共和党保守派のレーガンが民主党現職のカーターを破り、

新政権が船出したばかりだった。カーター政権後半は、ソ連のアフガニスタン侵攻やイランのホメイニ革命と在テヘラン米大使館人質事件など、その影響が今日の国際情勢にまで尾を引く歴史的な事件が相次いだ。失墜した「西側の盟主」米国の威信を回復してほしいという米国民の期待を背に、政権についたレーガン大統領は「強いアメリカ」を唱えてソ連との対決姿勢を鮮明にし、「冷戦激化」がいわれていた時期でもある。そんな中、鈴木善幸首相が5月上旬に訪米することになった。政治部出身のワシントン特派員にとって、首相訪米は一大イベントである。その1年前には、大平正芳首相が米、メキシコ、カナダを歴訪。最後の訪問地バンクーバーで、多民族国家ユーゴスラビアをまとめていた大物

チトー大統領死去の報を受けそのままた訪欧、葬儀に参列してから帰国した。疲れた大平首相を待っていたのは国内政局の急転だった。内閣不信任案の可決、衆院解散、総選挙、そして選挙戦さなかの大平首相急死へと続いた激動の政局を、東京から二日遅れで届く新聞で追う日々が続いた。政治部で自民党の宏池会を持ち、当時の派閥会長である「お父ちゃん」こと大平幹事長を担当し、大平内閣が誕生してほどなく赴任していた私にとって、「大平首相急死」は信じられない出来事だったし、後継首相に善幸さんが就いたのも驚きだった。善幸さんとレーガン大統領は、人をそらさず同い年という以外にあまり共通点はなく、むしろハトとタカなど違いの目立つ政治家といえた。両政府がいかに振り付け、どうい

出合いとなるか興味深かった。朝日新聞からは、先輩の故中島達郎記者が同行してくることにになり、「情報よろしく」という電話があった。霞クラブで一緒に日中国交正常化交渉の取材に駆け回った仲である。日米首脳会談には共同声明がつきもので、外交当局は毎回、両国の関係を象徴的に表現するスローガンづくりに腐心する。

80年の大平訪米では、首相が東西冷戦の重荷を背負って苦しむカーター大統領に「共存共苦する」と連帯を表明して感激させ、大統領は日米の「実りあるパートナーシップ」を称えてこれに答えていた。

ポトマックの桜もとつくに散ったころ、親しい国務省の日本担当者に鈴木・レーガン会談の準備状況を取材、「今回の共同声明では日米パートナーシップにどんな形容詞をつけるのか」を尋ねた。すると「パートナーシップではない。今回はアライアンス（同盟）だ」という答え。意表を衝かれる思いだった。「どうか。日本側が国内の反発を警戒して受けつけないのではないか」とさぐると、彼は事もなげに「いや、もう日本側とも合意した話だ」と言う。確かに、大平首相は79年の訪米の際、歓迎式典あいさつですでに米国

を「同盟国」と表現していたし、ソ連のアフガン侵攻後の80年訪米のときは、「西側の一員」として対米協調姿勢を鮮明にしていた。安保条約を結び、日本に多くの米軍基地を抱える両国関係を「同盟」とうたうことに何の不思議もない、という米側の考えは理解できないではなかった。ただ、安保や憲法をめぐる、用語にも神経を砕くデリケートな日本の国内論議の積み重ねを取材してきた皮膚感覚とでも言おうか、「日本側がよく踏み切ったな。すんなりいくのかな」という思いがよぎった。

この情報は、鈴木首相一行の出発を翌日に控えた5月3日になって、中島さんの手になる「日米関係『同盟』と表現」という横カットと縦見出し3本の大きな記事として朝日新聞朝刊一面トップに載った。リードの文中に、珍しく「同盟」(alliance)と英語表記が添えられていた。

「同盟」とうたうことに、ひっかかりを感じたのは中島さんも同じだったのだろう。しかし、ほどなく彼から、「伊東さんにぶつけたら、確かに君の情報通りだったよ」という電話があった。故伊東正義外相のことである。大平さんの腹心中の腹心であった伊東さんとすれば、大平さんが表明すみの「同盟」を共同声明に盛り込むことに何の異存もなかったに違いない。

この情報は、鈴木首相一行の出発を翌日に控えた5月3日になって、中島さんの手になる「日米関係『同盟』と表現」という横カットと縦見出し3本の大きな記事として朝日新聞朝刊一面トップに載った。リードの文中に、珍しく「同盟」(alliance)と英語表記が添えられていた。

この情報は、鈴木首相一行の出発を翌日に控えた5月3日になって、中島さんの手になる「日米関係『同盟』と表現」という横カットと縦見出し3本の大きな記事として朝日新聞朝刊一面トップに載った。リードの文中に、珍しく「同盟」(alliance)と英語表記が添えられていた。

この情報は、鈴木首相一行の出発を翌日に控えた5月3日になって、中島さんの手になる「日米関係『同盟』と表現」という横カットと縦見出し3本の大きな記事として朝日新聞朝刊一面トップに載った。リードの文中に、珍しく「同盟」(alliance)と英語表記が添えられていた。

に焼け石に水。それから二日後、伊東外相は辞任した。

中日新聞の宇治敏彦さん(現専務、当時は東京本社政治部長)の「鈴木政権・八六三日」(行政問題研究所)で、私は善幸さんがこの訪米を「平和で活力ある国際社会を目指す日米関係」というキャッチフレーズで構想していたことを知った。「和の政治」を説きハト派を自任してきた善幸さんとすれば、レトリック上でも、自分の手で「同盟」への歯車を一つ回したとは認めたくなかったのだろう。

ブッシュ大統領のイラク政策を支持し、サマワに自衛隊を派遣し、沖縄の海兵隊移転では巨額負担を決め、と米戦略のジュニア・パートナーの役割を何のためらいもなく果たしてきた小泉政権のいまから振り返るとまさに今昔の感がある。だからこそ、「同盟」の2文字に抵抗感を持ち続けた善幸さんに、日本の今がどう映るかを聞いてみたい気がする。

のむら・あきお会員 1943年生
まね 67年朝日新聞入社 政治部員
ワシントン特派員 アメリカ総局長
論説副主幹 総合研究センター所長
など 03年から05年まで国連広報センター所長 現在 早稲田大学大学院客員教授

■「東京証券取引所で午前11時から記者会見をやらせて欲しい。テーマは『阪神電鉄に対する株主提案等について』。会見者は村上世彰」。

6月5日午前8時半ごろ、東証・兜記者クラブに入った「村上ファンド」からの電話は、6月のクラブ幹事社だった我々を慌てさせた。同日付朝刊各紙の1面には「村上代表きよう逮捕」「村上ファンドきようにも強制捜査」などの見出しが踊っていた。その中で、マスコミへの露出を避けてきた当事者が、いきなり記者会見を申し込んだのだから。

間もなく逮捕が予想される人物の記者会見を受けるべきか、本来は悩ましい問題だろう。後で、記者仲間から「よく決断できたね」と言われたが、突然の事態でそこまで考える余裕がなかったのが実情だった。

会見場所について、村上ファンド側の希望は、東証の情報発信センター「アローズ」の会見場だったが、東証の上場企業または取引参加者でないため使用不可。使えるのは、せいぜい40人程度しか座れない兜クラブ内の会見室だけだった。カメラマンを含めてかなりの数の記者が集まるのは確実で、大変な混雑が予想されたが、先方は「結構です」と言う。なぜそこまで東証での会見にこだわ

るのか、という疑問は、記者会見の「引退表明」で初めて解けた。

午前9時、記者会見の実施をアونسすると、クラブ内は騒然となり、各社が一斉に電話連絡に走った。読売のブースには、クラブ非加盟の雑誌社や外国メディアなどから会見のオプザーバー参加を希望する電話が相次ぎ、記者の1人を電話取り次ぎ専門にする必要があったほどだ。

会見開始までの間、村上ファンド側からは「どうすればスムーズに会見場にたどり着けるか」「東証に警備員を付けてくれるようお願いできないか」などの要望が次々と出された。けが人は避けたいので、「できる限りの整理はします」と答えたものの、各社の取材を制限するわけにもいかず、会見が無事に済むか、最後まで自信は持てなかった。

午前11時の会見開始前には、エレ

東証・兜クラブ

幹事社の村上会見でん末記

▼黒井 崇雄

(読売新聞社)

ベーター・ホールから会見室まで取材陣でびっしり埋め尽くされた。「危険なので、通路を空けてください」という幹事社側の要請にも全く反応なし。定刻の約10分前に現れた村上元代表は、もみくちゃにされながら何とか会見室にたどり着いた。

もつとも、小生は、人波をかき分けることができず、クラブ内のテレビで会見の生中継を見る羽目になったが…。

会見の内容については、すでにテレビや新聞で詳しく紹介されているため、ここではあえて触れない。村上元代表の発言に対しては、人によって様々な受け止め方があるだろう。ただ、はっきり言えるのは、経済関係の記者会見としては、「社員は悪くありません」というセリフで有名な野沢正平・山一証券社長の記者会見(1997年11月24日)以来の、歴史



弁明80分—狭い会見室に100人以上の報道陣がかけつけた(6.5 東証で) =読売新聞提供

に残る会見だったということだ。

後日、予想通り、「なぜ逮捕が確実な人間に弁明の場を与えたのか」という趣旨の批判が東証に寄せられたという。しかし、会見時点で逮捕が決まっていたわけではないし、何よりも、国民が最も言動に注目している人物の記者会見を断る理由は考えられない。

この「歴史的事件」に(会見室に入れなかったとはいえ)かかわれたことは、記者として非常に貴重な経験になったと思う。

くろい・たかお 1989年入社 経済部内閣府担当 ロンドン支局などを経て06年2月から兜クラブキャップ

■ロシアで初の主要国（G8）首脳会議（サンクトペテルブルク・サミット）が7月15日に開幕する。天然ガスや石油などエネルギー資源を最大の強みに、ソ連崩壊の混乱を克服した大国の存在感を示したいプーチン政権。しかし欧米諸国からは、ロシア国内のマスコミ統制やロシアが今年初めに隣国ウクライナへの天然ガス供給を一時停止した問題で批判がやまず、プーチン政権は自国の主張への理解を得ようと積極的だ。それだけに外国メディアにとっては政権の本音に迫れるチャンスでもある。

しかしサミット本番を考えれば、運営上の混乱や、絶対に起きてほしくないものの、昨年の英国のグレンイーグルズ・サミットの際に起きたロンドン同時テロのような事態への対応も万が一の可能性として想定しておく必要がある、最後まで気の抜けない取材となりそうだ。

「ここにプレスセンターができません」。サミットまで1カ月余りとなった6月8日、国営のロシア通信社を通じて募集された下見ツアーに参加した記者仲間がアゼンとした。サンクトペテルブルク郊外にある会場のコンスタンチン宮殿と隣接の敷地内

サンクトペテルブルク・サミット 積極姿勢のプーチン政権、不安材料も

▼三宅 利昌
(共同通信社)

で、ロシア大統領府の担当者から宮殿の歴史的な由来などについて丹念な説明を受けたが、肝心の国際プレスセンターはプレハブを建設中。最も知らなかったインターネットなどの通信手段は試せないまま終わった。

翌9日からはG8財務相会合がサンクトペテルブルクで始まったが、警備をめぐりトラブルも起きた。深夜に日本政府幹部による記者懇談が予定され、日本メディアの記者が日本政府のプレスセンターがあるホテルに入ろうとしたが、入り口のチェックで、主催者側が配った記者カードの記載内容やこのホテルに宿泊していないことを理由に警備担当の若い女性が記者を入れようとせず「駄目」の一点張り。結局、日本政府の担当者に来てもらうはめになった。

テロの懸念もある。筆者はロンドン同時テロの取材も経験したが、当時は欧州や中東などの同僚が続々と応援に来た。しかしロシアへの入国

は査証（ビザ）が必要で、取材態勢はこの辺も考慮して準備しないといけない。ロシアではチェチェン共和国の独立派武装勢力による数々の大規模テロが起きているが、6月17日にチェチェン武装勢力指導者が殺害された際には共和国首相が「武装勢力はサミットに合わせチェチェンで大規模テロを計画していた」と発言。不気味さを漂わせている。

プーチン大統領はサミットが迫るにつれメディアへの露出度をこれまで以上に高めている。6月2日には主要国の通信社代表と会見。中国・上海で15日に開かれた上海協力機構首脳会議の際には深夜、クレムリンのロシア人記者や一部外国記者を招き「内政懇話」を行ったほどだ。

プーチン政権下では、政府系企業が政権に批判的なテレビや新聞を買収するなどし、政権によるメディア

の掌握が進行。米国の民間人権団体「フリーダムハウス」が発表した世界各国の「言論の自由度」の報告書でロシアは194カ国中の158位で、「自由度指数」は下降の一途をたどっている。

6月5日にモスクワで開かれた世界新聞大会の式典で世界新聞協会（WAN）のオライリー会長が「自由で独立した報道の確立が必要だとロシアでは認識されていない」と大統領の目の前で懸念を表明。大統領は「ロシアのメディア法は最もリベラルだ」などと反論した。

プーチン政権は各国が注目するサミットまではメディアに開かれた体制をアピールしていくことだろう。

問題はサミット以降。ロシアはプーチン大統領の3選が憲法で禁止された2008年の大統領選挙に向け「政治の季節」を迎えるが、野党勢力の主張も平等にメディアに反映されるのかどうか「報道の自由」の試金石だ。今の状況では楽観は到底できないが、それを検証して報道していくことが責務となる。

みやけ・としあき 1985年入社
モスクワ支局、ロンドン支局などを経て
05年10月からモスクワ支局長

“岩手公園”名称変更問題

県民に納得いく
議論の材料提供を

▶志田 澄子
(岩手日報社)

雄大な岩手山を背に北上川が流れ、緑と水に恵まれた岩手県の県都・盛岡市。南部氏が築いた盛岡城の城下町として栄えた。その盛岡市で今、開園百年を機に「岩手公園」の新名称をめぐり、賛否両論が渦巻いている。「『盛岡』『城跡』を前面に」という賛成論、「愛着がある」という反対論。議論から県民のさまざまな思い、歴史観が浮き彫りとなっている。たかが名称、されど名称。

新名称を設けることは岩手公園開園百周年記念事業の一つとして5月に同市が発表した。狙いは同市が力



啄木・賢治の作品にも登場する岩手公園

を入れる「盛岡ブランド」全国発信に当たり、城下400年の「盛岡」と、財団法人日本城郭協会の日本百名城に選ばれた「城跡」をアピールし、今後の観光やまちづくりの弾みにしたい考えだ。

発表当時、市は「名称改称」としていたが、数日後の記者会見で市公園条例の改正が不要な「愛称」とした。一方、同市公園みどり課は「新名称は公的な看板、標識に使い、実質上の名称変更だ」と説明し、混乱のもととなった。

岩手公園は廃藩後、荒廃した城跡を平民初の首相・原敬が県と南部家の橋渡し役となり、委譲された県が

整備し、1906（明治39）年に開園した。34（昭和9）年からは市に管理が移管されている。

新名称問題について本紙は発表当時から社会面で扱い、問題を提起してきた。市や、改称推進団体から「ネガティブキャンペーンを張っているのか」と批判も出た。

現在、同公園に足を運ぶ人はごく一部に限られ、全国有数の美しさを誇る石垣をはじめとするその価値は桜の季節以外、県内外に十分に認知されていない。戊辰戦争に敗れ、朝敵として不遇の扱いを受けた南部藩の復権と重ね合わせる関係者の思いも理解できる。

しかし、市が言うように賛成者は本当に多いのか。そこで本紙は市政記者クラブ4人と県内10支社局の協力で県民100人にアンケートを実施した。その結果、反対62人、賛成13人、どちらでもよい25人だった。

6割を超える反対理由で最も多かったのは「100年間親しんできたから」。旧制盛岡中学で学んだ石川啄木や宮沢賢治の作品にも使われたことを指摘するファンも少なくなかった。唐突な印象を受けた県民も多く、「県を代表する公園なのに盛岡

市だけで決めるのか」などの声もあり、市は真摯に耳を傾けてほしい。

今後、市は有識者、市民ら9人による懇話会を開き、市議会とも相談しながら、開園記念日の9月15日に新名称を発表する。同問題がどこに着地するかは現時点では見当がつかない。

岩手日報社は今年創刊130年を迎え、社屋はこの公園と目と鼻の先にある。開設以前から同公園とともに歩んできた当社としては県民が納得のいく議論の材料提供に労を惜しまないつもりだ。

しだ・すみこ 1990年入社 学芸部
紫波支局などを経て 2006年4月から報道部

盛岡市メモ

人口 300,093人（5月1日現在）

世帯数 122,663世帯

岩手公園 1874（明治7）年の盛岡城建造物解体後、著しく荒廃していた城跡を1903（明治36）年、県知事北条元利が公園整備を計画。南部家相談役だった原敬が当時の南部家当主、利祥に「県民のための公園」として借用を働き掛け、県への無償貸与が実現、06年に開園した。設計は全国でも著名な造園家長岡安平が手掛けた。34（昭和9）年、管理業務が県から盛岡市へ移管され、盛岡城は37年に国指定史跡となった。

2016年五輪招致

説得力ある計画と
開発手法を

▶三村 龍一
(西日本新聞社)

福岡市で今、2016年の夏季五輪招致が話題になっている。山崎広太郎市長が国内候補都市に「名乗りを上げたい」と言い出したのは昨年4月。今年2月には札幌が招致レースから降り、勝負は東京都との一騎打ちになった。8月30日の日本オリンピック委員会（JOC）選考でどちらが選ばれるのか、地元メディアとしても大きな関心事だ。

ただし、市民の招致気運はいまひとつ。民間会社や市民団体が行ったアンケートはいずれも反対が過半数。市は招致の賛否を市民に直接問うこ

とを避けているが、開催計画案についてどう感じるか遠回しに尋ねたところ、46%は「共感できない」と回答。「共感できる」は47%で、賛否は真つ二つに割れた。

反対派にとって一番の不安は財政負担。福岡市の財政指標は全国の政令市でも最悪レベルで、市債残高は1兆3000億円に上る。財政再建のため学童保育さえ有料化しようというのに、五輪招致などできるのかと心配しているのだ。

市の試算では、メインスタジアムをはじめとする競技施設や道路などのインフラ整備は総額4864億円。うち7割を民間資金で賄うことで、市の負担は08年五輪候補地だった大阪市の約3分の1、970億円に抑えられると算盤をはじく。開催まで毎年100億円ずつ積み立て、公債を着実に返済すれば、「10年後の市債残高は1000億円減る」と山崎市長は強気だ。

ようやく削減できた市債発行額が再び増えないか。五輪後につけが回ってこないか。市の試算にはいろいろ疑問が残るが、最大の懸念は博多湾に突き出した須崎埠頭（約90ヘクタール）再開発。メイン競技場や選

手村を集める福岡五輪の心臓部だ。整備費用3800億円のほぼ9割を民間から調達するため、まず民間に住宅地として売却し、選手村などは五輪期間中だけ借り受ける。そんな青写真を描くのだが、約2500億円に上る住宅が本当に売れる保証はない。破たんを繰り返す第三セクター同様、市が負債を尻ぬぐいするところにならないか心配だ。

そもそも、計画の中核となる埠頭再開発が民間任せでいいのか。埠頭は都心に近い一等地。五輪後の福岡市の都市像を左右する重要な開発なのに、市の理念が見えない。業者が利益に走れば、海辺の景観を遮る高



選手の交流の場となるオリンピック広場のイメージ図

層ビルが密集し、統一性のない、虫食い開発になりかねない。再開発は民間への利益誘導ではないかと勘繰りたくなる。

市民は五輪開催自体に反対しているわけではない。地方でコンパクトな大会を実現できれば、「金がかかると」「乱開発を招く」という五輪イメージを変えることにつながる。問題は説得力のある計画、そして開催手法だ。市は財政に関する情報を積極公開し、市民を交えた公正な第三者機関の審査を受ける必要がある。そして、五輪後の新しい街の姿を示し、市民の審判を仰ぐべきだ。

みむら・りゅういち 1986年入社
社会部 東京支社報道部などを経て
05年3月から地域報道センター

福岡市メモ

人口 1,411,000人（6月1日現在）

世帯数 659,310世帯

五輪開催計画 競技を行う39施設のうち6割を半径10キロに集中する「コンパクト五輪」。メイン競技場や選手村などの主要施設は都心に近い同市中央区の須崎埠頭に集約する。競技施設や関連インフラの整備費総額は4864億円。約7割を民間資金で賄うことで市負担額を970億円に抑える。選手輸送費や会場警備費などの大会運営費2850億円には、国際オリンピック委員会（IOC）からの分配金1026億円や入場料収入550億円などを充て、市負担はゼロで済ませる。開催期間は2016年7月22日から8月7日までの17日間。

会員インタビュー



ビダンクマール・ラワル インド大使館公使(報道担当)

▼出身はインド北西部のパキスタンに接するグジャラート州。州で有名なものとはときくと、知っているだろうと思うがとの表情を浮かべ、「マハトマ・ガンディーの故郷」と答えた。後で調べると独自の言語・グジャラート語(憲法で公認されている17の州言語の一つ)をもち、ガンディーはそれを使って自伝を含めほとんどの本を書いたという。

近年のインドの経済発展ぶりについては、「日々驚きの連続という感じだ。デリーの地下鉄開通や大都市郊外のショッピングセンターの建設ラッシュが最も象徴的だ」と。ただし、識字率や若者の失業率など早急に改善すべき問題も多々ある、と付け加える。

外交官歴は30年を超すが、日本を担当したことはなく、5月に赴任したばかり。これまでの接点は主に電化製品やマイカーの「マルティ」(スズキの現地モデル)に限られていたという。「菜食主義だが魚は食べられるので、スシは一度トライしてみたい」とも。

東京の大使館に持ち込まれた募金が6月中旬現在で約5000万円。「沖縄から募金に来た人もいます」と感激している。もっぱら地震で破



アド・ユリントロ インド大使館参事官(広報担当)

▼1960年、ジョグジャカルタ生まれ。外交官になってから今年でちょうど20年になる。外国赴任はニューヨークとケープタウンで、日本は3番目。昨年12月に着任した。大使館での仕事は「広報」だが、ジャワ島での地震に関連した募金の受付も仕事の一つ。

一年以来の日記をもとに戦争体験をまとめた。天皇を現人神と仰ぎ、宮城遙拝、靖国参拝、軍事教練、勤労動員に励んだ軍国少年。空をつんざく爆弾の音に肝を潰し、焼夷弾の笠であわや真つ二つかということも。敗戦の夜は切腹まで思い詰めたが、やがて新憲法によって蘇生する。

「箱根に行ったことがあるけれど露天風呂には入らなかった。なぜ?と聞いたら「他人と一緒に裸で入るのはちょっと」。帰国までにはまだ4年ほどある。「雪国へ行つて温泉に入りなさい」と勧めた。寒いのは?」というから「フィンランド人なんか冬の最中にサウナへ入つてから、氷を砕いて湖に飛び込むそうです」と教えてあげた(が、笑われただけだった)。(春海)

マイBOOK マイPR

いまを読む名言 昭和天皇からホリエモンまで

轡田 隆史(朝日新聞出身)

陸軍の愚鈍さと「闘う」昭和天皇の発言や、「ヤミ金融」東大生社長らの自殺の遺書などにはじまる、ざつと90人の発言を集めて、拙い解説をつけた。7年前にハードカバーで出したものに、ホリエモンの「人の心はお金で買える」など新発言を加え

軍国少年 Fe の日記

堀越 作治(朝日新聞出身)

あの戦争は自分にとって一体何であったのか。戦後60年を機に改めて自問した人も多かったに違いない。昭和一ケタの私もそうで、旧制中学

一年以来の日記をもとに戦争体験をまとめた。天皇を現人神と仰ぎ、宮城遙拝、靖国参拝、軍事教練、勤労動員に励んだ軍国少年。空をつんざく爆弾の音に肝を潰し、焼夷弾の笠であわや真つ二つかということも。敗戦の夜は切腹まで思い詰めたが、やがて新憲法によって蘇生する。

知人の勧めで北九州市の「森鷗外記念自分史文学賞」に応募したら最終候補に残ったが、結局は次点に。(東京図書出版会 1365円)

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

「会見速記録」: 6月の新規掲載

- 福井俊彦日銀総裁「最近の金融経済情勢と金融政策運営」(06. 6. 20)
- デイビッド・ピリング・フィナンシャルタイムズ東京支局長「FIVE YEARS OF KOIZUMI」(英文)(06. 6. 14)
- 麻生太郎外相「中央アジアを『平和と安定の回廊』に」(06. 6. 1)
- 西修駒澤大学教授「憲法改正論議: 比較憲法的視野も含めて」(06. 3. 15)
- ロバート・インガソル駐日米大使「成熟期に入った日米関係」(1973. 3. 20)

■ ユナイテッド93 ■



ニューヨーク・マンハッタンの世界貿易センタービルの前にとどろついた時、ビルの中ほどから煙が噴き上がっていた。炎はまるで生き物のように動いていて、なんとも気味が悪かった。ビルが崩れ始めたのはその直後で、がれきと粉塵が猛烈な勢いで襲いかかってきたから、私は必死で逃げるしかなかった。2001年9月11日以来、すべての米国民が、同時多発テロとその騒ぎに巻き込まれ、逃げようのない修羅場に放り出された。最初は泣き叫び、打ちしおれる人が多かったが、こぼしを振り上げる人も目立つようになった。

ストイックに事実を再現

今も忘れることができないのは、児童たちに向かって「フセインを倒そう」と叫んでいた、小学校の先生である（かなりいいお歳のご婦人だった）。「ああ、米国人もこんな心理状況に落ち込むのか」と、ため息をつくしかなかった。映画は、このテロでハイジャックされた四番目の旅客機、ユナイテッド航空93便を描いている。乗客とハイジャック犯の闘いを、ドキュメンタリータッチで追いかけている。作り物のアクションは一切入れず、ひたすらストイックに事実を再現しようとしていて、好感が持てた。最近見た映画の中で、もっとも重くて迫力のある作品だった。しかし実を言うと、私は、最初から最後まで登場人物がばたばたと動き回るこの手の映画が苦手である。うそでもないから、もう少し当事者の内面を見せて欲しいと思ったのは、米国人の心情を見すぎたからかも知れない。毎日新聞出身 9・11テロ当時 ニューヨーク特派員 上村幸治

小泉政権と政治報道

求められる 現場の意識改革

週末の昼下がりから始まる土曜サロンは鬼門である。なにしろ会場であるプレスセンタービルの裏手には、JRAの場外馬券場がある。サロンの生みの親である青木彰筑波大学名誉教授が存命のころは、トイレに行くふりをして30分ほど中座し、財布を軽くしてとぼとぼ戻ってきては司会席にいた青木老人に「どこへ行っていた」とよくにらまれたものだ。さて、本題は6月24日に開かれた第32回土曜サロンの話である。5年続いた小泉政権に対する政治報道の検証がテーマで、テレビ朝日の看板番組「サンデープロジェクト」でプロデューサーを務める鈴木裕美子さん、幹事長補佐として昨年の9・11総選挙で自民党の広報戦略を取り仕切った世耕弘成さん、それに平成元年に崩壊した竹下登政権の末期から産経新聞政治部に籍を置く小生がそれぞれの立場からの報告を行い、活発な質疑応答が行われた。サロンでの発言は、出席者に自由な議論をしてもらうためオフレコが原則で、詳しくご紹介できないのが

残念至極であるが、小生以外の報告と論議は大変エキサイティングで興味深いものだったと記すことは許されるだろう。

鈴木さんの話からは、我々が知らないもうひとつの「サンプロ」がくつきりと浮かび上がり、テレビにだって放送法の存在の大きさを知らされた。世耕さんは、NTT広報出身という国会議員としては異色の経歴を持つ「コミュニケーションの達人」で、組織的かつ機動的に変身した自民党広報の一端を明かしてくれた。

これは独り言だが、自民党は10年前、いや昨年の郵政解散前の旧態依然とした自民党ではすでない。メディアはすでに手の内を読まれていく。一刻も早く政治報道の現場の一人一人が意識変革し、組織も柔軟に再編成しなければ、と柄にもなく考えさせられた土曜サロンだった。

産経新聞政治部次長 乾 正人

産経新聞界のO君の呼びかけで2001年4月から始まった。日本のジャーナリズムが抱えている様々な問題について、現役記者を交えて率直に議論することを目的としている。隔月1回最終土曜日(原則)に、クラブで開催。次回は9月30日午後2時半から。テーマは未定。新たに案内を希望される方はクラブ事務局の長谷川(03-3503-2752)。

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■「日本市民会議」設立記者会見

梶原拓前岐阜県知事（前全国知事会長）、浅野史郎前宮城県知事、加藤秀樹慶大教授らが呼びかけ人となり「日本市民会議」が設立された。その目的や活動方針などを梶原氏ら共同世話人が発表した。（6.5 10階ホール）

照会先：全国勝手連連合会事務局 Tel：03-5318-0955

http://www.kaerusouken.jp

日本再生研究会「再生日本」事務局 Tel：058-275-2562

http://www.nihon-saisei.jp

■IWC説明会

国際捕鯨委員会（IWC）総会（カリブ海の島国セントクリストファー・ネビス 6.16～20）を前に、森本稔日本政府代表団代表らが会見した。（6.5 大会議室）

■東ティモール緊急帰国スタッフ記者会見

東ティモールの治安情勢の悪化で5月末に国外退避したNGO法人ピースウィンズ・ジャパン（PWJ）のスタッフ中島純氏が、争乱のビデオや写真を紹介しながら現地の状況を報告した。（6.5 宴会場）

照会先：PWJ Tel：03-5451-5406

http://www.peace-winds.org

■広島国際アニメーション・フェスティバル

第11回大会（実行委、広島市など主催）が8月24日～28日、広島市で行われる。30分以内の短編アニメのコンペ。今回のテーマは「愛と平和」。58カ国・地域から応募のあった1764作品から本選対象作品53を決定後の記者発表。コンペでグランプリ（賞金100万円）をとった作品はアカデミー賞に自動的にノミネートされる。今回応募が多かったのは日本291、仏190、英162、米154、韓国138、カナダ115。このほかイラン38、中国29、台湾44など。（6.6 宴会場）

照会先：同フェスティバル実行委員会事務局

Tel：082-245-0245

■「不眠」がもたらす経済損失額試算記者説明会

日大医学部の内山真教授が不眠症と睡眠不足がもたらす日本経済の損失額を発表した。大阪の化学メーカー社員を対象に一カ月間の睡眠について調査・分析。その結果、効率低下、欠勤、遅刻などで年間3兆5千億円の経済損失が生じると算出した。（6.7 宴会場）

照会先：ウェバー・シャンドウィック・ワールドワイド Tel：03-5427-7390

●囲碁の会

荒井会員が初優勝

6月24日に開催した夏季大会には31人が参加、スイス方式（ひとり4局）により順位を争いました。全勝を果たしたのは荒井忠男、牧野賢治の毎日新聞OBの2人。ポイント計算の結果、優勝は荒井会員に決まりました。主な順位は以下の通り（敬称略）。

①荒井忠男②牧野賢治＝以上4勝③佐沢利和④田中信義⑤庭野静雄⑥柴田鉄治⑦友田錫、清水秀昭⑧西崎哲郎⑨栗木欽一⑩有賀忍＝以上3勝⑪石川基⑫佐伯晋⑬江口浩⑭中野正彦⑮塚本一、高井明昌、三ツ野充蔵⑯日比野和幸、下村澄⑰吉川真澄＝以上2勝。

新しいOB会員

■「青森県立美術館」開館記者会見

7月13日に「青森県立美術館」が開館する。三村申吾青森県知事、建築設計者の青木淳氏らが全国紙や美術専門誌、外国報道機関を対象に記者会見。「青森県の芸術風土を世界に発信したい」とアピールした。開館記念展の「シャガール～『アレコ』とアメリカ亡命時代～」は9月24日まで。（6.13 10階ホール）

青森県立美術館：青森市大字安田字近野185

Tel：017-783-3000 http://www.aomori-museum.jp

■日本ジャーナリスト懇話会 6月例会

郭昂・野村総合研究所主任研究員（郭沫若の孫）が「転換期を迎える日本企業の中国戦略」のテーマで講演した。5月の総会で同懇話会の新会長に仲見氏（共同出身）、副会長に広瀬次雄氏（毎日出身）が就任した。（6.22 大会議室）

●夏季大会○

理想の碁打ちは都留先生

決勝で庭野さんに半目勝ちしたのは、まったく運がよかったとしか言いようがありません。日比野さんには見損じに助けられました。2敗してもおかしくはなかったので、ラッキーで、少し気恥ずかしい優勝でした。

毎日新聞を辞めて11年になりますが、その間、碁を改めて勉強しなおし、少し腕が上がったような気はしています。もっと強くなりたいとは思いますが、理想の碁打ちの姿は、例会で毎度お見かけした故都留重人先生です。私も、あのように悠々と碁を楽しむ境地になれたらと思っています。

荒井 忠男

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

**吉
カクテル****7月：天馬 Pegasus**

7番目の干支、午をモチーフにしたオリジナル・カクテルです。ウォッカをベースにミントの香りをさわやかにアレンジしました。お試しください。

**和
食****千倉産あわびの懐石コースがおすすめ**

(8月4日まで)

千倉産のあわびの酒蒸しとご飯をメインにしたコースです。グラス冷酒がついて6300円です。

(板長：藁科浩)

小鉢三点 お椀：冷やしとろろ 生もの：刺身三点 焼き物：焼き蓮根他 メーン：鮑酒蒸し他冷やし煮物 食事：鮑ご飯 甘味：豆腐ムース

**洋
食****一般メニューが半額に(7月31日～9月1日)**

会員の皆さんの日頃のご利用に感謝し、こたしも上記の期間限定で、半額サービス(サービス料別)を実施します。例えば、シェフお薦めのディナーコース(前菜、スープ、魚料理、肉料理、デザート、コーヒー)も5000円未満でおためしいただけます。事前に予約をお願いします。(シェフ：黒須修一)

好評の千倉産あわびのステーキ・フルコース(6300円)は7月28日までです。こちらもご予約願います。

8月の貸室は50%引きです

8月の部屋代は一律50%引きになります。まだご利用いただける日がありますので、早めにお問い合わせください(03-3503-2724)。この期間限定の特別宴会プランも用意しています。例えばこのプランを利用し、15人ほどのパーティーで小部屋を使った場合、お一人5000円の会費ですみます。同級会などプライベートな会合にもご利用ください。

夏の臨時措置

8月14日(月)から19日(土)の一週間、ラウンジは午後6時まで、会議室は午後5時までとさせていただきます。この間、9階和食レストランはお昼のみの営業です。10階洋食レストランは平常通りです。

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン(9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン(10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	URLアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能

委員=石田昭彦 伊藤三郎 仙石伸也 高橋利行
豊田 宰 西田善夫 松本侑壬子

連絡=長谷川和子 本庄五月

(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

◆8月24、25日に記者研修会◆

地方紙・地方局の中堅・若手記者を主な対象にした記者研修会を、ことしは8月24日(木)、25日(金)の両日で行います。

今回の目玉のひとつは、模擬裁判への参加です。このほかいつものように研究会、昼食会を行う予定です。模擬裁判は最高裁広報課の協力を得て、東京高裁で行います。裁判員制度導入で裁判がどのように変わるのか。実際に公判、評議、量刑判断を体験していただきます。それによって、新制度の下の法廷取材や報道のあり方を各自が考えるきっかけになればと思います。

現在までに決まった研究会の講師は①浅野史郎前宮城県知事、②玉木明氏、③鳥越俊太郎氏です。

浅野氏には小泉政権の下で進められた三位一体改革をめぐる新聞、テレビ報道を総括していただく予定です。玉木氏には記事例を材料に「変わらない記事・報道スタイル」の問題点を、日本版「オーマイニュース」編集長に挑戦する鳥越氏には「体験的ジャーナリスト論」を話していただく予定です。

全プログラムが決定して、各社の編集・報道責任者あてに通知するのは7月20日頃になります。今回は模擬裁判の関係で定員を60人にさせていただきますので、案内が到着次第お早めにお申し込みを。

日本医師会が入会しました

7月1日付で社団法人日本医師会が法人賛助会員として入会しました。登録会員は唐澤祥人会長と広報担当の中川俊男常任理事のお二人です。5月に唐澤氏が新会長としてクラブで会見した際、もっとメディアとの関係を大事にしたいと表明。今回の入会を希望しました。

<法人代表変更>

J-WAVE (新) 楠田修司代表取締役社長
(旧) 井村文彦氏

<会員現況> 法人会員 147社 基本会員 808人
個人会員 1,656人 法人・個人賛助会員 77社 187人
特別賛助会員 74人 名誉・功労会員 10人
計 224社 2,735人

今後の行事予定(7/4現在)

- 7.14(金) 15:00~16:30 (10階ホール)
「著者と語る」長谷川毅氏『暗闘-スターリン、トルーマンと日本降伏』(中央公論新社)
- 7.19(水) 15:00~16:30 (10階ホール)
「著者と語る」山口伸美埼玉大教授『日本語の歴史』(岩波新書)
- 7.21(金) 18:00~19:55 (10階ホール)
試写会「紙屋悦子の青春」
- 7.24(月) 15:00~16:30 (10階ホール)
「在日外国人のみた小泉政権5年⑤」
アフターブ・セット元駐日インド大使

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテーブルお知らせしています。

写真回廊

撮影

小倉 元司

(産経新聞社
東京写真報道局)

W杯ブラジル戦Ⅱ 6・22 (現地) ドルトムント



悔しさの真実

日本チームのサッカーワールドカップドイツ大会は終わった。予選リーグで一勝もできなかった結果は、「惜しかった」のか「当然」なのか。

予選リーグの戦いぶりで判断するのは早急にすぎる。決勝トーナメントに勝ち進んだ強豪たちのゲームをみればいい。彼らの違いは、サッカーを知らない人の目にも分かるだろう。

サッカーの『悪魔の事典』(あるのかどうか知らないが)には、こう書かれている。

【シュート】 ゴールに向かってボールを蹴ることではない。ゴールの枠の中でキーパーが取れないところにボールを入れようとする。ポテポテでもいい。

【ボディーチェック】 手以外の体を使って相手からボールを奪う。格闘技。強靱な肉体と度胸が求められる。

【フェイント】 相手にボールを奪われないために行う『騙し』の動作である。

【走る】 全速力を意味しない。90分間つねに、相手より一歩速く走ればよい。

キーワードは「駆け引き」。チームのだれよりも世界の舞台を経験している中田英寿が、一番知っている。

(橋場義之)